

【佳作】

初めてのスーツ

山田幸夫・大阪府

今年の元日。年賀状の束の中に、毎年届く谷口くんからのものがなかつた。

氣になつて、昨年の年賀状を探して見ると、そこには、（古希を迎へ、来年から年賀状は失礼します）と書いてある。昨年も見たはずなのに、特に氣に留めることもなかつたのだろう、いつの間にか忘れていたのだ。

今までの彼の年賀状は、必ず自筆で達筆な一、二行の文言が添えられているのだが、昨年のものは筆圧が弱くかすれた震え気味の文字が並んでいた。迂闊にも彼の異変に気付かず一年が過ぎていたことになる。

後ろめたさと感傷的な気持ちで、小学校と中学校の卒業アルバムを引っ張り出し眺めた。——団塊の世代。小、中学校ではクラス数は多かつたが、その九年間、彼とは同じクラスで過ごした。中学校の三年十八組の集合写真もある。修学旅行の写真では、私と谷口くんが肩を組んでいる。細身の私とは対照的に彼は見るからに野球少年然とした体格だ。ピッチヤーダつた彼の練習相手として、近所にある神社の境内でキャッチャーをさせられたことなど思い出す。

彼は、大学への進学を希望していたが、高校を卒業して家業の紳士服店を継いだ。高校在学中から父親の体調が思わしくなく、大学進学を諦めテーラーの道を選んだ時、私たち二人は約束を交わした。

「オレの最初の客は、山田やな」と彼が言つたのか、私が「お前の最初の客はオレやぞ」と言つたのか、今では記憶は定かでないけれど、私が就職した時、スーツを作つてもらつた。仕立て上がつたスーツを身に着け、その姿を鏡に映すと、すつと自然に背筋が伸びた。しばらく、そのまま眺めていると、

「谷口テーラー初仕事や。就職祝いに贈るよ」

彼は笑顔でそう言い、スーツの見開き左右を見せながら付け加えた。

「スーツは、見えるところだけやないんやで、裏地が大事なんや。滑りのええ生地が、着ている人の姿をより引き立てるんやぞ」

裏地には、桜の花弁をかたどつた当時の大阪万博シンボルマークがプリントされていた。スーツは、当時の私の給料二か月分はしただろう。もつたいなくて普段着ではなく、特別な勝負服として着用した。そして、オーソドックスな仕立てのため、流行に影響を受けず長く着続けることができた。——

二人の思い出が、次から次へと蘇り、たまらず彼の店に足を向けた。大阪府南部の私の自宅から電車を乗り継いで三時間。大阪市内の私鉄最寄り駅の改札口を出た。とたん、幼少期からの三十数年間の思い出が詰まつた宝箱のふたが開く。そんな瞬間だつた。

「ユキオちゃん！　お帰り」そう声を掛けられても何の違和感もなく、返事をしてしまいました。しかし、西側に延びる商店街の建物の構図は当時のままだが、色彩が心なしか暗い。不安が迫る。彼の店はあるのだろうか。商店街を歩くが、店がない。探している間に裏手にある神社の境内に出た。キヤツチボールをした所だ。ボールを投げた壁、セミ捕りで仰ぎ見上げた楠は当時より太くなり、もっと広かつたはずの境内も狭い。水飴を舐めながら、自転車の荷台に乗せた紙芝居をワクワクしながら観たことなど懐かしい。

商店街に戻り、店の近辺の人尋ねてみると、あつさり「施設に入つていて」と教えてもらえた。近くだったので、その足で向かうが、施設の受付でいきなり言われる。

「認知症がすすんでいて、面会してもあなたのことは分からぬと思いますよ」

介護士さんが押す車椅子に乗りやつてきたが、私のことを怪訝そうな表情で見るだけだった。反応はない。彼の姿を見ていると徐々に辛くなつて、いたたまれなくなつていく。とつさに話題も思いつかず、「また来るよ」としか言えなかつた。帰り際、介護士さんが、「紳士服店を営んでおられたことは、覚えてますよ」と、教えてくれた。

自宅に戻つた私は、処分しないで置いてあつたあのスーツを出して着てみる。細身の体形も変わってないのでピッタリだつた。

翌週、卒業アルバムを持ち、スーツで身を包んだ姿で再び、彼のもとを訪れる。応接部屋に車椅子で現れた彼に向かつて、

「谷口っし、また来たぞ！」と声をかけたが、反応はない。それでも私は、スーツを左右に開き、裏生地を彼に見せながら言つた。

「お前がオレのために作つてくれた初仕事のスーツや。覚えてるか？　ここにも谷口テーラーつて、名が入つてるやろ」

彼は、プリントされた裏生地を泳ぐような目でしばらく眺めていたが、それが凝視の眼差しに変わつた瞬間、目元が弹けた。

「山田か？　山田！」絞り出すような声だ。

「そや、オレやオレや、山田や」後は声にならなかつた。